

「雨ニモマケズ」の生について

森松幹治

二〇〇八年九月の米有力証券リーマン・ブラザーズがサブプライムローンの行き詰まりにより破産した。これに誘発されて世界中に金融危機が波及し、世界を大不況のうず巻きに巻き込んでいる。一九八〇年代から、先進国が市場原理主義・規制緩和・グローバリズムを伴った新自由主義政策を押し進めてきた。これらの政策がことごとく破綻。この世界同時不況は、一九世紀末不況、一九二九年恐慌につづく三番目の「世界恐慌」といわれている。

その一つを賢治は三七年間という短い生涯で経験している。賢治は死の三年前一九三〇年に「雨ニモマケズ」を手帳に書き留めた。東北地方は一九二六年から一九三一年までヤマセや風水害に見舞われ、稲の生育が悪く凶作が続いた。東北の農村では現金収入が断たれ、借金返済に田畑を手放したり、娘の身売りまでおきる事態になった。

二〇〇九年現在も又、賢治が生きた時代と同様の世界恐慌が進行している。今年度中に国連食糧農業機関（FAO）は世界人口六八億人に対し飢餓人口が一〇億二千万人をこすと予測。本年七月厚生労働省発表有効求人倍率〇・四二二倍、完全失業率五・七％。また同五月労働力調査全労働者に対する非正規労働者の割合が三四・一％、国税庁調査年収二百万円以下が一千万人をこえる。日本社会に貧富の格差が広がりつつある。

賢治は農民芸術概論綱要の序論で「世界全体が幸福にならない限り、個人の幸福はありえない」といつている。

仏教では根本的な苦しみを生老病死の四苦としている。雨ニモマケズの詩が起承転結で構成されているとすれば、東西南北の転の段では東が病、西が老、南が死、北が生に対応するといわれている。「生」については「ケンクワヤソショウガツマラナイカラヤメロトイヒ」となっている。

あらしをなくしたいという賢治の願

いは「みんなが幸せに生きる」ことに通底する。人が言葉を生みだした原初には言葉に命が宿っていた。他人の不幸を我がことのように考えた賢治は、命の言葉をつむぐ詩人だった。

宮沢賢治研究会 賢治研究

107号 2009.10より転載